

去る2016年5月15日(日曜日)白謡会・春の会が横浜能楽堂本舞台で行われ、会友60余名による素謡、仕舞、独吟などと共に舞囃子も二番ありました。私はこの会で舞囃子「須磨源氏」を舞わせて頂きました。

私にとって貴重な機会でしたので、友人・知人に案内状を差し上げ、当日は沢山のお客様をお迎えすることが出来ました。その中に、私が4年前から始めた俳句講座の先生とクラスメート達もおられて、会の終わった後に俳句を詠んで贈って下さいました。

能楽と俳句の結び付きは案外深く、例えば松尾芭蕉の『奥の細道』の中にある一句「むざんやな甲の下のきりぎりす」は能「実盛」の中で、討ち死にした斎藤実盛の首を検分した樋口次郎が発した「あなむざんやな。斎藤別当にて候ひけるぞや」という詞を踏んで、実盛の甲(かぶと)の祀られている小松・多太神社(今の石川県)で詠まれた句です。

今回は私の稚拙な舞囃子にも拘わらず、これを句材に先生および友人が俳句にしてくださったことは、大変嬉しく思うと同時に、こういう結び付きがとても楽しいなと感じました。そして俳句には臨場感を甦らせる魅力があると思いました。この会の記念としてお許しを得て掲載させていただきます。

薫風や早舞決まる須磨源氏

黄の袴捌(さば)きて舞ふや夏めける

鳴物に床踏み鳴らし青嵐

言の葉を肚(はら)より出して夏きざす

鳥語(ちょうご)めく謡の詞(ことば)薄暑光(はくしよこう)

注 鳥語は分かりにくい言葉の意

能を觀し名残(なごり)を踏みつ青楓

朝野告水 (以上六句 先生詠)

夏足袋のびたりと決まる須磨源氏

舞台降り閻浮(えんぶ)の汗を拭いけり

注 閻浮は人間の住む世界、この世の意
須磨源氏の詞章に使われている

黒田 緑 (以上二句 友人詠)

最後に拙句も一句。

お囃子に囃され舞ふや花の袖

注 これのみ季語が春なのは春の会の為

尾崎純子